

としまんや

須藤靖貴
YASUTAKA SUDO

1





講談社文庫

どまんなか(1)

須藤靖貴

講談社

【著者】須藤靖貴 1964年東京都生まれ。駒澤大学文学部卒業後、製薬会社の営業マン、スポーツ誌の編集者などを経て、1999年に『俺はどしゃぶり』（光文社文庫）で第5回小説新潮長篇小説新人賞を受賞しデビュー。著書に『フルスウィング』『押し出せ青春』『セコンダウト』『リボNSTEAKS』（以上、小学館文庫）、『セキタン！ おちかましてオンリー・ユー』（講談社）、『抱きしめたい』『池波正太郎を歩く』（ともに講談社文庫）、『力士ふたたび』『デッドヒート（1）～（3）』（以上、ハルキ文庫）、『大関の消えた夏』（PHP研究所）などがある。最新刊『3年7組食物調理科』（講談社）を近日刊行予定。

どまんなか(1)

す どうやすたか
須藤靖貴

© Yasutaka Sudo 2014



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2014年3月14日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277801-5

目次

——どまんなか(1)——

プロローグ……………9

1 戻^{もど}ってきたマウンド……………13

2 ゴキゲンに助けられた……………22

3 われらが^{おもしろだいこう}大代台高野球部……………43

4 ゴキゲン野球教室……………56

5 永遠の夏休み計画……………73

推薦のことば	松井 秀喜	222
あとがき		218
6	さっぱりさっぱり	97
7	ピッチャーは胸を張れ	110
8	メシ！ メシ！ メシ！	137
9	こんなにうまいものがあるか	163
10	このままじゃだめになる	170
11	手に汗握らず	177
12	応援スタンドの天使	185
13	鶏口牛後	191



講談社文庫

どまんなか(1)

須藤靖貴

講談社

目次

——どまんなか(1)——

プロローグ……………9

1 戻^{もど}ってきたマウンド……………13

2 ゴキゲンに助けられた……………22

3 われらが^{おもしろだいこう}大代台高野球部……………43

4 ゴキゲン野球教室……………56

5 永遠の夏休み計画……………73

6 さっぱりさっぱり…………… 97

7 ピッチャーは胸を張れ…………… 110

8 メシ！ メシ！ メシ！…………… 137

9 こんなにうまいものがあるか…………… 163

10 このままじゃだめになる…………… 170

11 手に汗握らず…………… 177

12 応援スタンドの天使…………… 185

13 鶏口牛後…………… 191

あとがき…………… 218

推薦のことば 松井 秀喜…………… 222

どまんなか
(1)

おもしろだい
大代台高校野球部・高校野球大局

一 野球は、バットやボール、グラブなど、いろいろな道具をうまく使いこなして集団で戦うスポーツである。

二 だから奥おくが深い。格闘かくとう技で圧倒あつとう的体格差がある場合、体格で劣おとるほうが勝つことは困難きわ極まるが、野球はそうでもない。道具を上手に使つてプレーしたチームが勝つことがままある。武道ならば、柔道じゅうどうや相撲すもうよりも剣道けんどうに近い。だから野球は楽しい。練習がいかに厳しくとも、道具を使いこなす喜びがある。いわば児戯じぎの領域に近い楽しみがある。小学生、中学生の野球もいいが、ぐつとレベルの上がる高校野球はとくに楽しい。プレーするほうも、観みるほうも。

四 高校野球は楽しいものなのだから、プレーヤーは楽しまなくてはいけない。どれだけ真剣しんけんに楽しんだか。それで勝負が決まる。

プロローグ

フィールドにいる別の一人のために。

自分以外のチームメイトのためにプレーをしろ。

ゴキゲンはそう言った。

自分自身のためでもなく、チームのためでもなく。

最初は意味がよく分からなかった。野球をするのは自分のプライドのため、チームの勝利のためではないのか。

それではあたりまえすぎる。試合に出ている自分を除いたメンバー八人の中の人。プレー中にその顔を思い続けることで、チームの輪はより強くなる、と言う。

自分のためでは、自分があきらめてしまえばおしまいだ。

ラグビーという「ワン・フォア・オール、オール・フォア・ワン」というのもい

いけれど、「世界平和！」みたいでスケールが大きすぎて、「おれたち感」がない。あれこれ考えてみれば、「自分以外の一人のために」は悪くない。

問題はだれのことを思うかだ。

そういうのって、なんだか照れくさい。

そして、これがいちばん気になるところだけど、それは公表するのか。試合後のミーティングで話そうってのか。

「だれにも話さなくていい」

ゴキゲンと言った。

「試合で力を出しきれたかどうか。精いっぱい野球を楽しめたかどうか。思い^{おも}浮かべたチームメートの顔が笑って讃^{たた}えてくれればよし。しぶい顔をしたなら、反省して次に進む」

言葉にする必要なし。自分だけが分かっていたらいい。

カッコよすぎる。

毎試合ですか、と質問が飛んだ。

「一試合につき一人。そうだな、いつでも同じ選手、つてのはナシにしようか。思考^{ほうき}放棄になっちゃってしまつては意味がない」

めんどくせえ！ と声がする。

「いや。せっかくだから発表しようか。そうだな。三年生が勇退する解散式だ。試合前に選挙の投票みたいに提出してもらおう。それをおれが集計して発表する。これを解散式の伝統にしよう。よろしいか？」

部室中がざわめいた。

さつき感じたカッコよき度がぐぐつと下がった。だれにも話さないからカッコいいんじゃないか。

「ええと、なんだ。『思う』とか『慕う』とかの英単語」

つぶやきのようなゴキゲンの問いに、「ヤーン」「フォロー」と答えが返った。

「じゃあフォローでいいか。MFPだ。これが決まるわけだな」
即席で造語が決まり、ゴキゲンは満足そうに笑った。

つまりは——チームメイトに思われる選手になれ、ということだ。

みなが競うようにがんばれば、チーム力は上がる。

「甲子園目指してがんばれ！」と言われるよりもずっと気が利いている。

ただし、思わせぶりに言われても、答えはほぼ決まっているんじゃないか。おれだ。

みなが思い浮かべるのはおれだろう。エースのおれに決まってる。

エースがチームメイトに思われなくてどうする。

「解散式は八月を予定している。八月下旬^{げじゆん}。意味は分かるな」

おれたちはうなずいた。

七月上旬に始まる全国高校野球選手権の埼玉県大会^{さいたまけん}で早々と敗退すれば、解散式は一学期中だ。MFPの発表が遅^{おそ}くなれば遅くなるほどシーズンを長く戦ったことになる。

「このチームは必ず勝ち進める。大台^{おおしろだい}の名を、高校野球の歴史に刻みこむんだ」
ゴキゲンの言葉に、返事が威勢^{いせい}よくそろった。